

2024年7月18日(木)

京都市基幹相談支援センター研修事業 相談支援専門員等スキルアップ研修 「個別避難計画について」

「あいりん」は京都市の基幹相談支援センターとして、京都市内の相談支援専門員を対象にした研修を年1回実施しています。今年度は長野保健医療大学特任教授の北村弥生氏をお招きし、障がいのある方の災害時の対応について考えました。北村氏の講義やグループワーク以外に、障がいのある方の「個別避難計画」の現状について京都市の保健福祉総務課から説明がありました。また、DWATの一員として能登半島地震でも現地で活躍された京都市中部地域生活支援センター「にしじん」の宇川征宏氏から被災地支援についての提言があり、能登半島地震で被災された視覚障がいのある当事者にも自らの体験談を語っていただきました。出席者は63名でした。

時に無慈悲な脅威という一面を見せつける自然と共存していくには、いざという時の行動やアイテムを備えておくことが欠かせません。いま大地震が発生したら?避難所で生活することになったら?過去の出来事や見聞きした情報を頼りに、自分自身や障がいのある方の身に起こるかもしれない事態に想像力を働かせます。

ただ厄介なことに、これさえあれば・これさえしておけば間違いないという完璧で安全な準備は存在しません。災害発生時の規模や時間帯は事前に分かるものでもなく、待ち構える私たちの暮らしの在り方や地域の性格、障がい特性、日常に潜む仕組みや構造の脆さなど、置かれている状況や抱えている事情も一人ひとり違うからです。想像の世界を広げるほど、簡単に解決できそうにない問題が次々と湧き出てしまい、時にそれを言い訳にして、準備へのハードルを高くしてしまう。「喉元過ぎれば...」ではありませんが、いつの間にか根拠のない楽観が多勢を占め、想像力を働かせることすら止めてしまうこともあるでしょう。

今回の研修は「災害時には平時に準備していたことしかできない」という北村氏のメッセージから始まりました。つまり「平時から準備していることは災害時でも役立つ」と言い換えることもできます。当たり前かもしれませんが、結局は当たり前の日常を積み重ねた先に、相談支援専門員としてなすべきことがあるのではないかと。私の率直な感想です。日常からいざという時の行動を考えているからこそ、混乱を最小限に抑えることができる。日常から関係機関の働きに興味と敬意を示すからこそ、いざという時でも連携できる。日常から自分の強みを発揮できるからこそ、いざという時も踏ん張ることができる。日常から障がいのある方に「教えてください」という姿勢で臨むからこそ、いざという時も当事者の声を置き去りにしない。

いま私たちが日常からできることをする。それは無駄ではない、無駄にしない。「被災地支援は日々の関わりの延長」という宇川氏の言葉は、現場で培われた凄みをもって日常の重要性を裏付けてくださいました。同時に、障がいのある方の災害時の対応がテーマであった本研修の辿り着いた答えのような気がしてなりません。

本研修にご協力いただいた皆さまへ感謝の気持ちを込めて報告いたします。

出口剛史



↳ 研修中の様子



↳ ワークの様子